

第1回 養父市振興計画審議会 議事要旨

日 時 令和3年5月26日(水) 13時30分～16時00分
場 所 オンライン会議
出席者 委 員 オンライン：畑正夫(会長)、福井啓子(副会長)、秋山卓寛、片岡高市、
小泉一輝、佐々木秀行、大封健太、田渕和香菜、栃尾英一、
中島高幸、西谷秀和、松田佳苗、宮本早紀、宮本裕美、村上裕樹
事務局 市長 広瀬栄、経営政策課 田村亘、岡山慎、渡邊宰
欠席者 委 員 上垣秀和

I. 進行状況等

1. 開会
2. 委員の委嘱
3. 市長あいさつ
4. 委員自己紹介
5. 会長・副会長選出
6. 会長あいさつ
7. 諮問
8. 議題等
 - (1) 養父市振興計画審議会の進め方について
 - (2) 養父市まちづくり計画(仮称)素案について
 - (3) 質疑応答
 - (4) 意見交換
9. その他
10. 閉会

II. 議事等

養父市まちづくり計画(仮称)素案について、市経営政策課(事務局)から説明がなされた後、意見交換が行われた。主なやりとりは以下のとおり。

- (委員) これまでの検証について、PDCAサイクルを有効にするためにも、本計画までの取組の検証結果を最初に挿入する必要があるのではないか。特に特区の取り組みについて、市民にどれほどの恩恵があったのかなど、検証が具体的に必要。
- (事務局) 総合戦略の検証結果については、毎年度検証委員会を開催した結果をホームページで公表している。国家戦略特区の効果検証についても、昨年度神戸大学に協力をいただきながら、効果等については一定の評価をいただいている。
- (委員) 計画に具体性を。全体的に抽象的な表現が多く、どんな取組が行われるのか、イメ

ージできない。大枠を示すということなのかもしれませんが、可能な範囲で具体例を示すことも必要。

- (事務局) 個別の事業を示す実施計画なども含めた計画の全体としてイメージしていただきたいと考えるが、もう少し詳細の説明を行ったうえで、分かりにくい部分、分かり易い表現に変えた方が良い部分などのご意見をいただきたい。
- (委員) 人口増に対する取組を。最も大きな課題である「人口増」に対する取組を明確に打ち出す必要があるのではないか。
- (事務局) これまで取り組んできた地方創生、人口増に向けた取組をしっかりと取り組んでいくことが必要とは考えている。今回のコンセプトに関しては、ある意味人口減を想定しながらも必要なまちづくりを考えていきたいことを提案しているような計画になっている。これまでには行ってきていないようなことにも積極的にチャレンジしていくという計画内容になっている。
- (委員) 言葉の吟味を。市民に伝わりやすい言葉・表現を選ぶ必要があると思う。バーサタイルリスト、イノベーション、ローカライズ、インクルーシブなコミュニティ、スマートビレッジなど、横文字の多用を避ける。居空間など、伝わりにくい言葉の再考。
- (事務局) 分かりにくい部分については、言っていただきたい。用語集の作成も予定している。
- (会長) 1つ目は、国家戦略特区の取り組みについては頭の方に書いておくべき。
2つ目は、具体をどう落とししていくのが大事な話。これは審議会のなかで議論していけばよいかと考える。
3つ目は、人口増については、なかなか難しい問題。人口増を目指すとはっきり書くのか。人口増という言葉がなかなか難しい問題となってきている中で、事項のとらえ方をどうするか、という考え方を「居空間」という言葉を用いながら説明することが大事。
4つ目は、おそらくこれから普通に使われていく言葉も中にはあるかもしれないが、日本のなかでは使われない言葉もあるはずですから、用語集を作るよりかは、言葉を置き換えて、読んでいただいて分かるようにしておくことが大切。
- (委員) 市役所内に IT 関係の人材はいるのか。
- (事務局) 市の組織としても今年度からデジタル推進室を設置している。また、まち全体のデジタルに関する取組をデザインしていただけるような専門家をアーキテクトとして現在お願いをしている。
- (委員) 第2次総合計画では、将来の人口は2万6千人ということであったと思う。今回の計画に目標人口が出ていないように思うが、総合戦略のなかでも2万人というキーワードが出ています。今回の計画に目標人口は掲載しないのか。
- (事務局) この素案では、数値目標が未記載となっている。最終的には数値目標を示しながら計画を作っていきたいと考えている。この審議会の会議中に市として目指すべき目標値をお示しできるように検討している。人口の事を触れずに計画を作ることは難しい。どこかには必ず人口の事に触れるようにしていきたい。

- (会長) 計画に対する想い、将来の養父に関する想い、あるいは、もっとこんなことをやれたらいいなという地域の活動でも結構ですし、皆さんが委員としてお思いになっていることを順にお話をいただきたい。
- (委員) 具体的なイメージができないと感じた。先ほど、数値目標については今後作成いただくという説明を頂いたので、今後出てくるとは思うが、より具体的な計画にしていった方が市民の皆様の理解も得やすいと感じる。
- (会長) 数値化を手掛かりにして、具体化していくことが大切。
- (委員) 基本構想と基本計画の流れは理解できるが、基本計画から実施計画への流れが分かりにくい。また、全体的に総花的であるように感じている。実施計画の中身を適切に書いた方が良いのでは。
- (会長) 全体の構成が分かりにくいというのがあり、おそらく具体性が高まってくると良いのですが、現時点では事業のつながりも分かりにくいため、重点化した視点をもう少し整理する必要。
- (委員) 養父市の存続についてはどうなのか。近隣との合併を想定した内容は計画書に記載されていないが、それを想定した将来像を提示することはできないのか。
- (事務局) 重複するような事務は広域的な視点から連携を行い、効率化を図るという趣旨から、例えば南但消防本部、南但クリーンセンターなどにおいては朝来市と広域的な行政を行っている。合併を前提としたまちづくりを現時点で考えるのではなく、現段階としては、養父市が持続的になるまちづくりを考えていきたい。
- (委員) この基本構想の中に合併に関する構想については入っていないということで理解した。
- (会長) 課題解決の単位としての人口の必要性。ある程度の人口がいないと課題が解決しなかったというのがこれまでのやり方なので、そこを、次の段階へ進めたいということなのだろう。財政面のことを考えて合併するのではなく、まちとしての役割、機能、暮らしのことを考えて、どういう人口の在り方が良いのか、これを考えてみたいということだと思う。人口問題を考える際に、様々な視点からの検討が必要と思われる。
- (委員) クラウドファンディングをお勧めしたい。商品の販路を見つけることや募金等にも繋がるため、市をあげてやっていただきたい。また、動画配信サービスを活用し、この審議会での議論なども含め、情報発信することが大切。また例えば、キャッシュレス、見守り等も推進することができるスマートウォッチを普及させることについても、積極的な配布やデータ収集に努めていかないと田舎では浸透しないと考える。文化はつくるものである。
- (会長) デジタル化も基本的な生活を守るために有効に活用していくということと、また、実験が大事だということ視野に入れておくことが大切。
- (委員) 養父市は住みたい田舎ランキングでは上位となっているが、住みたいイコール住み続けたいとはならない。住み続けたい養父市とは、という視点から計画を考えたい。

また、子どもたちにも養父市の将来を考えていただく機会をつくるのがとても大切だと考える。また、情報が行き届かない方への支援も大切。テレビや新聞だけでは分かりにくい方もいらっしゃる。計画を誰に伝えたいのか、何を取り組んでいくのか、市民に伝えたいことを盛り込んでいくことが必要。

(会長)

基本的な姿勢について言っていたと受け止めた。

(委員)

地区別計画の策定について、養父市は地域ごとにそれぞれの特色があるため、大切なことだと考える。これについては賛成で素晴らしいが、具体的にどのように作成し、実践していくのか。

(会長)

事務局から説明はあるか。

(事務局)

養父市は地域ごとにそれぞれの特色がある。養父市をひとまとまりに考えるのではなく、特色を発揮していくことも大切だと考える。この地域別計画については、地域ごとのまちづくりの方向性を示すものとしているが、この方向性は地域の皆様と共に考え、アップデートしていく計画としたいと考えている。

(会長)

内容について具体的にさせていただき、市民の間隔に合うのかどうかを議論していくことが大切。

(副会長)

10年後、30年後の構想は具体的な部分についてイメージできないため、詳細についてはこれからの部分もあると思うが、分かり易いものにしていただきたい。委員としても住みやすい養父市を実現するために、市民の方とのギャップを埋めることに努力していきたい。

(会長)

長期を考えると短期が見えなくなってくる。この辺りをどんなふうに整理するかという点も今の課題である。先ほど、地域別計画というものが上がってきましたが、これが上手く間を埋めてくれ、計画の全体的な流れが見えてくるかもしれない。

(委員)

養父市まちづくり計画と、現在養父市が進めているスーパーシティ構想との関係性は。

(事務局)

スーパーシティ構想で考えている取組については、まちづくり計画が描く将来像を実現するための取組として位置付けられる。

(会長)

大きな方向性を示すものとしてはまちづくり計画ということになる。その中で臨機応変に大きなプロジェクトも巻き込みながら、行きつく先に繋がる道を考えるということになってくるのだろう。

(委員)

冊子を読む限りでは、具体的にどうなるかが分からない。人口はどう考えても減っていくことについては間違いなく、これは養父市だけでなく日本全体が向かえている課題である。これを無視して計画は立てられない。自分事に取り組むためにどうするのかを検討することがもっと大事。

(会長)

自分事化するためにはもっと現実的なお話でないと分かりにくいですよというご指摘だと思うが、全くその通りだと思う。人口減少傾向というのは、いま地方創生のなかでは「食い止める」という表現になっているが、そういう状態の中で人口をどう考えるか、人口のとらえ方自体から大きく変えていくことも必要なのかもしれない。

れない。

- (委員) 現時点の素案では抽象的すぎるため理解に苦しむというのが本音である。事務局的には、みんなで作り上げたという計画とするために、現状としてはこのような形になっていると想像する。会社経営等においても同様に、一本の目的に向かうことが明確であるからこそ、そこについての議論ができ、中長期計画が立てられるが、素案はいろんな項目があるため集約がつかない状態になっているように感じる。「居空間」を「人口増」に変えるくらい、分かり易い言葉に置き換える必要がある。
- (会長) 今回のまちづくり計画の本当の意味は何かというのをしっかりと問うべきだということ。この養父市を次世代へ引き継ぐためにどんな風に考えていくべきかを考え、人口の考え方もよく練って、そのうえで「居空間」が出てくる、こうすると具体的に繋がりが生まれてくる。いまのところこの辺りが分裂状態のようなことなのだろう。この辺りについては、事務局に整理をお願いしたい。
- (委員) 全体的に抽象的すぎるため、何について意見を述べるべきかについても分かりにくい。人口が減少していくなかで、デジタルで補い、行政サービス等を上手く回していくことについては良いことだと考えるが、具体的な検討を行っていくにあたり、どこの自治体でもやっていること、代わり映えの無いことではなく、できれば養父市でしかできないこと、例えば、84%が森林で県下最高峰の氷ノ山があること、朝倉さんしょや轟大根などの特産品もあるため、養父市ならではの事が盛り込まれていくと良い。
- (会長) おそらく、現在事務局が作成した素案については、皆さんが思われているようなことを咀嚼して書いているような気がするため、それをもう一度しっかりと書いていくと、ずいぶんと感じが変わってくるのかもしれない。
- (副会長) 養父市が若者の定住のために分譲地を行った「すこやかなまち」については完売となっている。今年はそこから7人の子ども達が笑顔を見せながら小学校へ通っている。これからもっと増えていくと思うが、この子どもたちの笑顔を大切にしたいと考える。
- (会長) 多様な人が住むというのが大事。最近は高齢者の方が若い人の数よりも多くなっているため、それを考えると、当たり前のようにだが難しい課題のひとつだと考えるべきだと思う。
- (委員) 人口減になることでのネガティブなことは色々と思いつかぶが、畑会長が「まちの課題解決のために必要な人口増」とお話しされたことで、人口増にする意味がよく分かった。市が掲げた未来像を実現していくプレイヤーとしての役割は何だろう、何をしていこう、という視点で聞いている。
- (会長) 人口増にするという意味を、単に減少していく実人口のみを考えていくのではないということが大切だということ。また、自分たちが未来像を実現するために何をするのかを考えることが大切とのご意見いただいた。
- (委員) 少子化については20年前からずっと言っているが、何も変わらない。問題なのは、

結婚したくてもできない、あきらめるしかないということ。商売についても人口が減っていく中でやっていくことは難しい。大切なのは普通ではいけないということ。本当に変えたいと思うなら、この町から日本を変えてやるんだというくらいの事をやらないと。

(会長)

本日一番多く出たのが、取組をしていくのだから、具体性がほしいということ。特に、目標を通して具体を感じ取るというのが一つの方法。人口に対する考え方をどう考えるのかについても考えるべき課題になってくると思う。事業について、政策の事業は短期スパンであるため、地域別の計画をどのように考えるかが一つの鍵になってきそう。その鍵は事務局が握っている。この内容については自治体が勝手に決めるわけにはいかない。もう一つは、大きな変化をどう受け止めるかが大きく課題になってくる。抽象的で分かりにくい、というのが、一番分かり易い反論ともいわれているが、ここをどう突破していくか。変化をもたらして、持続可能にしていくにはどうするかという議論がこれから必要だろう。